

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02609

研究課題名（和文）言語表現力育成と連動した食育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of dietary education programs connected with enhancement of expressive language skills

研究代表者

大森 玲子（Ohmori, Reiko）

宇都宮大学・地域デザイン科学部・教授

研究者番号：70447259

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、フランスの学校現場で展開されたピュイゼ理論を活用して、言語表現力育成と連動した食育プログラムの開発を行い、食の場面における感覚語彙の蓄積と表現を通して言語能力の育成に寄与するか明らかにすることである。開発したプログラムを受講した児童は、感覚を通して見出された言葉を児童自身の体験に紐づけて表現するようになった。また、活動実施前よりも実施後のイメージマップの広がりや一つの単語から派生する単語数の増加が認められ、感覚語彙の蓄積と表現におけるプログラムの有効性が明らかとなった。さらに、イメージマップの中心に据える単語への理解度深化にも繋がる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語能力育成に資する一助とすべく、日常生活にある食の場面を活用した食育プログラム開発を行った。本研究で開発したプログラムを実施することにより、味わいを表現する日本語の多様性や食に関わる感覚語彙の増加に寄与することが認められるほか、言葉への理解促進効果も期待される可能性が見出された。言語能力育成に資する食育プログラムとしての有効性が初めて検証された意義を有する研究である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop the food-education program for Japanese students by utilizing the PUISAIS theory, which has already used for French students at school. It also aims to clarify whether the program contributes to the development of students' language skills through the accumulation and expression of sensory vocabulary in the contexts of food education in Japan.

The students who took the program developed in this study came to express the sensory words by linking them to their own experiences. The study also reveals the efficacy of the program in that the students could spread their image map and increase their vocabulary which derived from one word after the classroom activities. Therefore, it can be said that this study clarified the effectiveness of the program for Japanese students in accumulating and expressing sensory vocabularies and indicated the possibility of deepening the students' understanding of the words placed at the center of the image map.

研究分野：食生活学

キーワード：食育 食教育 味覚教育 表現 言語活動 絵

## 1. 研究開始当初の背景

食をめぐる状況の変化に伴って顕在化した食や栄養、健康等の問題に対処し、その解決を目指すため、平成17年7月「食育基本法」が施行された。平成18年度より食育推進基本計画のもと、全国的に食育施策が展開されている。食育先進地であるフランスの食育について整理すると、1974年、ジャック・ピュイゼ氏により開始された“味覚を目覚めさせる授業”に辿り着く。ピュイゼ理論の大きな特徴は、自分の五感について分析し、自分がどう感じているかに向き合い、感じ取ったことを言葉で表現する点にある。つまり、ピュイゼ理論による味覚教育は、食に関わる諸課題への解決や子ども達の食生活の改善に留まらず、言語表現の向上に資する食育とも捉えることができる<sup>1)</sup>。

平成29年3月に公示された『新学習指導要領』では、「主体的・対話的で深い学び」により知識の理解の質を高め資質・能力を育むことが示され、教育内容の主な改善事項で「言語能力の確実な育成」が掲げられた。また、同時期に公示された『栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育』では、「教科等における食に関する指導」において、教科等の目標や内容を身に付けさせる過程で食育の視点を位置付けることに触れられている。

自分の感じたことや食事をする際に「おいしい、まずい」「好き、嫌い」などの嗜好や感情に基づく表現に留まる子ども達が多く、味わいを表現する日本語の多様性や食に関わる感覚語彙の乏しさが認められる。一方、自分の感じたことを表現する方法として「サクサク」「ゴワゴワ」などのオノマトペ（擬声語）がある。オノマトペは日本語の特徴的な感覚表現として知られ、特に味わう場面での表現では効果的に使用されていると国外からの評価が高い<sup>2)</sup>。自分の考えや感じたことを適切に表現する上で、日常生活にある食の場面を活用したプログラム開発が期待されている。

1) PUISAIS Jacques、ET SI NOUS REFUSIONS la MacDonaldisation du Goût!、Délécio Editeur (2011)

2) 川端晶子ら、おいしさの表現辞典、東京堂出版 (2006)

## 2. 研究の目的

本研究は、フランスで展開されたピュイゼ理論を活用して、言語表現力育成と連動した食育プログラムの開発を行い、食に関わる感覚語彙の蓄積と表現を通して言語能力の確実な育成に寄与するか明らかにすることを目的とする。

各方面で実施されている食育活動を整理すると、食や栄養、健康における様々な課題を直接的に解決するような取組内容に集約される。本研究は、食に関わる種々の課題解決を進める上で、食べることによって得られる感覚語彙の蓄積、その語彙を用いた表現力の育成、他者との感覚の違いに対する受容等を通して、食に関する興味・関心を高め、自らの食に向き合う力を育むことを目指すとともに、食に関わる課題解決型の食育推進だけでなく、言語表現力育成に向けた食育のあり方を意義づけるものである。これらにより、学校教育で進められている言語表現力の育成と連動させた新たな食育の役割を見出すことを可能にする。

## 3. 研究の方法

本研究では、言語表現力育成と連動した食育プログラムの開発を目指し、三年間の研究期間で下記3点を遂行する（実際にはコロナ禍により五年間の研究期間）。研究代表者が研究の実施および全体の総括を行い、研究分担者がプログラム開発と評価に責任を持つ。調査については代表者が食育、分担者が言語表現力育成に関わる内容を担当する。

一年目	二年目	三年目
<p>【調査研究】 言語表現力育成に関わる学習内容調査・発達段階における言語習得プロセス調査</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>食育プログラム内容検討</p>	<p>【食育プログラム開発】 食に関わる感覚語彙の蓄積と表現を踏まえたプログラムの開発と試行</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>本実施に向けた課題の改善</p>	<p>【食育プログラム本実施】 子どもを対象にした言語表現力育成と連動した食育プログラムの実施</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>効果の検証</p>

一年目は、既存文献・研究、各省庁資料等のレビューを通して、我が国をはじめ諸外国の言語表現力育成に関連する学習内容を調査し、子どもの発達段階を踏まえた言語習得プロセスについて整理する。また、国内外における食育先進地の取り組み、特にフランスにおける健康教育(味

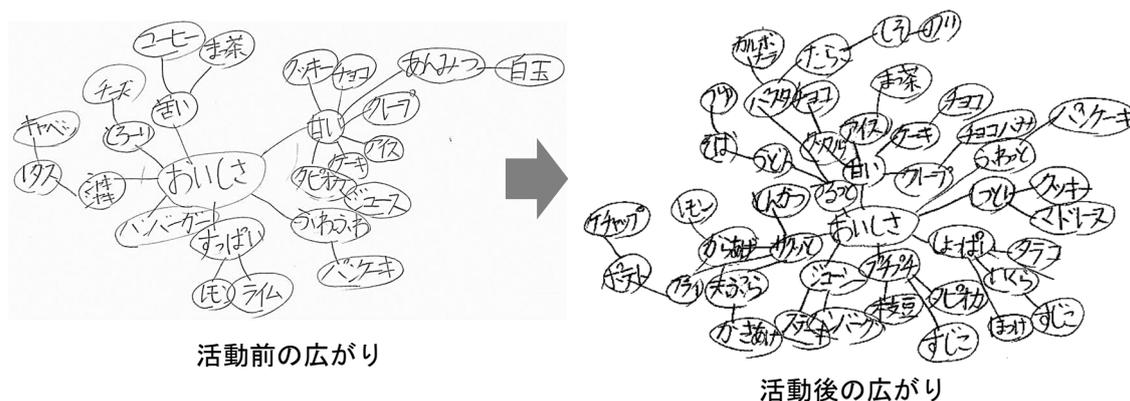
覚教育)について、現地にてヒアリング調査を実施し、食への意識変容や行動変容に繋がった食育活動の内容精査、言語表現力育成と連動した活動や取り組みの現状と課題について調査する。二年目は、一年目に実施した「学習内容調査」と「現地調査」の分析を踏まえ、食に関わる感覚語彙の蓄積と表現を踏まえたプログラム（「言語表現力」育成に連動した食に関する教材や実習など）を開発し、試行する。

最終年度は、開発した食育プログラムを用いて学校等における研修を通してプログラムの実行可能性と有効性について確認し、現場の教職員が自ら実施する際の注意点等について情報提供するほか、年間プログラムを子どものための味覚教育研究会とともに実施し、引き続き、効果検証する。

#### 4. 研究成果

既存研究や先進地における実践事例等の調査から、「フランスで展開されたジャック・ピュイゼ氏による味覚教育は、五感を通して味わったことを自らの経験に基づき判断し、その時点で獲得している言語により表現するものである。そのためには感性を刺激するような多くの生活体験を積み重ねる必要がある」こと等が見出された。得られた基礎資料をもとに、言語学の専門家である分担者および学校で食育を推進する栄養教諭・学校栄養職員等とともに分析を行い、言語表現力育成と連動した食育プログラムの枠組みを構築し、試行した。単回実施の効果を検証した結果、子ども達への学習動機づけとしての効果がみられること、学習内容の定着が期待されること等が確認された。プログラムの評価方法について課題がみられたため、次年度以降、プログラムの開発に加え、評価の在り方についても検討を実施した。

一年目の試行では調理実習や実食の場面で、オノマトペによる感覚表現を英語でどのように表現するかに重きを置いたものの、他言語に慣れない児童や英語未履修の児童にとって表現しにくい場面が見られた点が課題であった。また、プログラム評価において、対象者の活動内容に対する意欲や態度の変容を中心として事前事後の変化からプログラムの有効性評価に留まったため、言語能力育成評価の観点から欠如した点も課題であった。これら一年目の課題を踏まえ、二年目は感覚語彙を蓄積することに重きを置くプログラムに修正し、一年目同様、小学校高学年を対象として試行した。更に、プログラム評価の一つにイメージマップを加え、対象者の言葉の広がりを確認した。その結果、開発したプログラムにより、感覚を通して見出された言葉を児童自身の体験に紐づけて表現するようになり、また、事前よりも事後のイメージマップの広がり（下図）や一つの単語から派生する単語数の増加（下表）が認められ、プログラムの有効性が明らかとなった。一方、評価の観点を変えれば、イメージマップの中心に据える単語への理解度も読み取れ、プログラム評価の方法について更なる検討を要することも確認された。



活動前後の連想の流暢性比較

	総数(words)		平均 ± 標準偏差 (words)			記入者数(人)		
	活動前	活動後	活動前	活動後	<i>p</i> <sup>*</sup>	活動前	活動後	<i>p</i> <sup>†</sup>
1 <sup>st</sup> link	119	134	3.8 ± 1.6	4.3 ± 2.0	n.s.	31	31	—
2 <sup>nd</sup> link	183	260	5.9 ± 3.8	8.4 ± 5.9	< 0.05	30	31	—
Over 3 <sup>rd</sup> link	30	163	1.0 ± 2.1	5.3 ± 8.1	< 0.01	10	19	< 0.05

\* paired t-test、†  $\chi^2$ 検定、n.s.; not significant、「—」は統計量が計算されなかった。

最終年度は、開発した食育プログラムを用いて就学前施設における研修を通してプログラムの実行可能性と有効性について確認し、現場の教職員が自ら実施する際の注意点等について情報提供した。また、子どものための味覚教育研究会とともに開発した年間プログラム（視覚や嗅覚、触覚、聴覚への各アプローチ、食べ物の調理加工による変化への気づき等）について、小学生を対象に実施した結果、継続して受講することにより対象者の言語能力獲得に資するプログラムとして有効なだけでなく、対象者が五感を用いて感じ取ったことを言語とは別の表現様式である絵でも表出できる可能性を見出した。

研修会後の振り返りから、本プログラムを学校現場で実施していく上で、特に実施者(授業者)の態度や言葉掛け、発問の仕方への工夫を要することが指摘され、定期的な研修会や指導者養成プログラムの必要性が確認された。更にフランスの味覚研究所 (Institut du Goût) が作成した **Classes et Familles du Goût** (教室と家庭での味覚レッスン) の翻訳作業を進めることとし、プログラムを開発する上で参考とした味覚教育への理解を深める教材として、今後、普及させていく計画である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 篠大雄, 山野有紀	4. 巻 8号
2. 論文標題 英語の文法や文構造を正しく運用する力を育成するための指導に関する一考察 協働的ライティング活動とフィードバック研究を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 403-410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大森玲子, 上原秀一, 佐藤雅子, 露久保美夏, 田尻泉, 久保元芳, 宮代こずゑ	4. 巻 8号
2. 論文標題 言語表現力育成と連動した食育プログラムの開発: 小学生を対象とした実践を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 45 ~ 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 白石智子, 大森玲子, 宮代こずゑ, 石川由美子	4. 巻 9号
2. 論文標題 大学生における食生活指針への関心・実行状況調査: 食行動に関する心理的問題との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 43 ~ 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 上原秀一, 大森玲子, 久保元芳, 宮代こずゑ	4. 巻 7号
2. 論文標題 フランスの味覚教育における視覚の位置付け	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 341 ~ 344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大森玲子, 白石智子, 宮代こずゑ, 石川由美子	4. 巻 5号
2. 論文標題 共食イメージによる言葉掛け効果に関する予備的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 35 ~ 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上原秀一, 大森玲子, 久保元芳	4. 巻 5号
2. 論文標題 フランスの味覚教育カリキュラム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 341-346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山野有紀
2. 発表標題 小学校外国語教育におけるCLILの活用
3. 学会等名 第60回外国語教育メディア学会全国研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大森玲子, 上原秀一, 久保元芳, 宮代こずゑ
2. 発表標題 味覚教育の効果: 児童のイメージマップの変化から
3. 学会等名 日本認知科学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山野有紀
2. 発表標題 小学校外国語教育におけるCLIL
3. 学会等名 日本CLIL教育学会小中部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kozue Miyashiro, Reiko Ohmori, Satoko Shiraishi, Yumiko Ishikawa
2. 発表標題 Looks Delicious? Cerebral Blood flow in Young Adults with Eating Disorder Tendencies on Exposure to Food Pictures
3. 学会等名 The 41st Annual Meeting of the Cognitive Science Society
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白石智子、大森玲子、宮代こずゑ、石川由美子
2. 発表標題 大学生における食生活指針への関心・実行状況と食行動異常傾向
3. 学会等名 第83回日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山野有紀
2. 発表標題 CLILによる教科横断的授業づくり すべての児童の「生きる力」を育む学びの実現のためにー
3. 学会等名 小学校英語教育学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山野有紀
2. 発表標題 中学校英語教育におけるCLILの実践と可能性について
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 NHK「基礎英語0」制作班, 山野有紀	4. 発行年 2021年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 128
3. 書名 NHK基礎英語 小学生の英語のギモン相談室	

1. 著者名 大森玲子他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 207
3. 書名 家庭基礎 学習指導書 資料編	

1. 著者名 大森玲子他共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 299
3. 書名 技術・家庭 家庭分野[中学校検定教科書]	

1. 著者名 大森玲子他共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 279
3. 書名 技術・家庭 家庭分野学習指導書	

1. 著者名 山野有紀他共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 167
3. 書名 New Horizon English Course1[中学校検定教科書]	

1. 著者名 山野有紀他共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 159
3. 書名 New Horizon English Course2[中学校検定教科書]	

1. 著者名 山野有紀他共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 155
3. 書名 New Horizon English Course3[中学校検定教科書]	

1. 著者名 笹島茂・山野有紀編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 201
3. 書名 学びをつなぐ小学校外国語教育のCLIL実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山野 有紀  (Yamano Yuki)  (10725279)	宇都宮大学・共同教育学部・教授   (12201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------